都藝泥布

京都地名研究会　会報　第 58 号

平成 29 年 6 月 24 日発行

題字「つぎねふ」（山城の枕詞）

揮毫　吉田 金彦(名誉会長)　　編集　事務局

さる 4 月 23 日（日）龍谷大学大宮学舎において、2017 年度（第 16 回）の総会ならびに講演会が開催された。講演会では、西崎　亨氏に「枕詞『あしひきの』は『峯（はし）集きの』か」、鏡味明克氏には「地名の漢字」という演題でそれぞれお話しいただいた。

参加者は会員 43 名、一般 8 名で合計 51 名であった。昨年同時期比全体で一般参加者が 13 名減少した。広報のあり方に課題を残した。

総会　挨拶　綱本逸雄　会長　議長　糸井通浩副会長

報告　入江成治理事　忠住佳織理事

講演会挨拶　金坂清則副会長　司会　岩田　貢理事

総会〈議事録〉

議題（以下、決定事項を記す）

①2016 年度事業報告（『地名探究』15 号参照）

②2016 年度決算報告　（次頁資料参照）

会計監査報告

③2017 年度体制について

会則を改定して、常任理事を廃止し、理事に一本化した。また、役員に事務局長と会計を新設した。

理事　　退任　高橋聰子氏

理事　　退任　真下美弥子氏

会計監査　新任　酒井源弘氏　　継続　小西宏之氏

事務局長　新任　入江成治

会計　　新任　忠住佳織氏

④2017 年度事業計画

●総会・講演会　2017 年 4 月 23 日（日）

龍谷大学　大宮学舎　（済み）

●地名フォーラム

第 46 回 2017 年 7 月 23 日（日）14:00～

会場　龍谷大学　大宮学舎

1　地名学への招待Ⅰ　糸井　通浩氏

地名が「難読・難解」になるのはなぜ？

2　研究発表　　原田　良子氏

テーマ「薩長同盟締結地「御花畑」発見」

第 47 回　2017 年 10 月 22 日（日）14:00～

地名学への招待 2　未定

研究発表　　未定

会場　宇治市　ゆめりあうじ三階（予定）

第 48 回　2018 年 1 月 28 日（日）　14:00～

会場　龍谷大学大宮学舎（予定）

地名学への招待 3　未定

研究発表　　未定

●地名ウォーク

第 6 回　10 月 7 日（日）13:30～16:30

「宇治の地名を歩く」

案内人　酒井源弘氏（宇治市観光ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｶﾞｲﾄﾞ）

●会誌『地名探究』16 号　2018 年 4 月刊行

●会報「都藝泥布」第 58～61 号刊行予定

⑤2017 年度予算案審議（次頁資料参照）

⑥その他

本年度　理事会予定

第一回　6 月 24 日（土）10:30～

第二回　9 月 30 日（土）10:30～

第三回　12 月 16 日（土）10:30～

第四回　3 月 24 日（土）10:30～

実施場所はいずれもひとまち交流館で実施

本年度よりフォーラムは「地名学への招待」と研究発表の二部構成に変更し、講座と発表をめぐって意見交換ができる時間を確保する。発表については事前に 400 字程度の要旨を提出してもらい、事前に運営会で確認する。

発表時間は 50 分間、ディスカッションを 20 分間とする。ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰを毎回理事に依頼する。参加者には質問・感想記入用紙を会場で配布する。

2016年度決算 案）

収入				支出			
費目	予算	決算	備考	費目	予算	決算	備考
一般会員 ･家族会員会費	300,000	264,000	未納分および次年度分の払込含む）	事務費	30,000	17,660	研究会封筒代、会場使用料、振込手数料他
理事 ･賛助会員会費	150,000	186,000	未納分および次年度分の払込含む）	通信費	100,000	88,696	切手、会報等の発送費他
雑収入	24,000	21,300	一般参加者71名	会誌制作費	170,000	214,920	『4号』追加請求、 馳名探究15号』発行費
書籍販売	50,000	19,500	書籍、旧封筒残部販売	事務局費	100,000	90,000	事務局、会計、編集、HP管理、会場運営
寄付	－	13,671		講師謝礼等	140,000	110,000	講演、地名ウォーク講師料、御車代
前年度繰越	98,285	98,285		交通費	50,000	47,520	交通費
				特別会計繰り入れ	－	－	20周年事業準備金
				予備費	32,285	－	
				次年度繰越	－	33,960	
計	622,285	602,756		計	622,285	602,756	

2017年　4月　8日　以上の通り、決算報告を致します。

会計　忠 住　佳 織　印略）

2017年　4月　8日　監査の結果、相違なく決算処理がなされていることを認めます。

会計監査　小 寺　慶 昭　印略）

会計監査　小 西　宏 之　印略）

2016年度特別会計 20周年事業準備金）

2015年度までの累計	881,474	内、利子91円を含む
2016年度末繰り入れ	－	
計	881,474	

2017年度予算 案）

収入			支出		
費目	予算	備考	費目	予算	備考
一般会員 ･家族会員会費	285,000	95名見込み	事務費	25,000	市民ｾﾝﾀｰ利用料、文具他
理事 ･賛助会員会費	150,000	30名見込み	通信費	100,000	会報等の発送費他
雑収入 資料代他）	24,000	一般参加者80名見込み	会誌制作費	150,000	馳名探究16号』発行費
書籍販売	30,000	『京都の地名検証』『馳名探究』販売	事務局費	76,000	事務局、会計、編集、HP管理、会場運営
前年度繰越	33,960		講師謝礼等	110,000	講演、地名ウォーク講師料他
			交通費	50,000	交通費
			特別会計繰り入れ	0	20周年事業準備金
			予備費	11,960	雑費他
計	522,960		計	522,960	

講演１枕詞「あしひひきの」は「峯引きの」か

武庫川女子大学名誉教授　西崎　亨一

（西崎　亨氏）

枕詞には、枕と被枕との上下の関聯の不詳の例が極めて多い。例えば『時代別国語大辞典　上代編』には、上下の関聯の不詳例が 24・7%に及ぶ。「あしひきの」も「語義かかり方未詳」とする例である。多くの古語辞典も同じい。「あしひきの」についての論考についてもそれぞれに問題点が見られる。例えば、「あしひき」の用例には、字音仮名表記例・訓仮表記例とが存する。訓仮名表記例には「足引」「葦引」「足疾」「足病」「足曳」「足檜」等が見られるが、「疾」「病」「檜」字を「ヒク」と訓まれる確証はない。また、第二音節「キ」の乙類に関して二段活用とするが、上二段活用「ヒク」の確証はない。またまた、多彩な訓仮名表記に関して、原義の失われた結果とするが、その経緯に関する考証が全く見られない。等々である。

以下に枕詞「あしひきの」についての私釈を示す。

高野山西南院藏『甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌』（康和二・三年加点）・『金剛頂経蓮華心念誦次第』（院政期頃加点）・『大毘盧遮那経儀軌巻下』（院政期書写）の三書に「岑」（一例）「峯」（七例）字に「ハシ」訓が見られる。東寺藏『不動儀軌』（万寿二年点）、高山寺藏『不動尊念誦儀軌』（永承六年点）・『毘沙門引用符』（永承六年点）、石山寺校倉聖教藏『不動念誦次第』（長暦元年点）等にも「ハシ」訓が見られる。なお、『甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌』の「岑」字の「ハシ」には「●●」と差声されている。「あしひき」の「あし」の原義を「はし（峯）」と愚案する。語頭子音「ｆ」の脱落は古代日本語から見られるもので問題はない。　次に、「あしひき」の「ひき」は、「引く」とするものが多いが存疑。『類聚名義抄』『字鏡集』『字鏡抄』等の古字書に、「集」字に「ヒク」とある。「あしひき」の原義を「峯集き―峯の集まり―」と愚案する。因みに、「あしひき」の「あし」のアクセントが諸本で「●●」であるが、「ハシ」の「●●」とも符合する。

枕詞「はしたての」については、「語義かかり方未詳」とはしないが、「嶮しい山」に係るとする点は存疑。「はしたて」の「はし」も「峯」訓「ハシ」で処理できる。

漢字表記に対応する和訓、仮名表記語に宛てる漢字、その確証を求める営為が常に必要である。

（西崎　亨記）

講演２　　地名の漢字

三重大学名誉教授　鏡味　明克

（鏡味　明克氏）

地名の漢字の歴史解説を、明治書院昭和 62 年刊の『地名講座』の、私が担当した「地名の漢字」の章を全文コピーして、その主要部を解説し、全体を活用参看できるよう配布した。特に古代の法令に見られるように、漢字を使って日本語の地名を書く場合に、その地名の正しい意味を表す字よりも、「好字」すなわち、「良い意味の」字をあて字して地名の表記をすることが法令で定められたので、漢字の表記だけを見て語源が判る場合は決して多くない。また、漢字には本来なかった意味に、「国字」をつくった「峠」などの例がある。このような地名の表記の歴史を概観して、次に地名の分布に注目した。例えば、湿地を表すアイヌ語の「ニタッ」は、東北地方にも広く「仁田」などの漢字が連続するが、西日本、九州にも「仁田」「牟田」などの多くの地名があることから、東北の「仁田」なども京都からの周圏分布ではないかという説もあったが、東北のニタは北海道のアイヌ語のニタと連続しており、これに九州のニタ・ムタを含めれば、より広域な先史アイヌ語の連続ではないかと述べた。

講演の後半では、東北地方にアイヌ語地名が多く残っているのに、アイヌ語の基本的な地名語彙でありながら,東北地方にその漢字化が見られなかった。コタン（集落）、ヌプリ（山）などの地名について、アイヌ語の音訳だけではなく、日本語の訓読みあて字で、古館（こたち・こたて）などとあて字され、読みかえで古館（ふるだて）に変化したと思われる地名がかなりある。古谷（こたに）の中にもその変化があるかもしれない。また、山のヌプリも東北地方に多い「～の森

（もり）」の山名の中にあて字をされたのではないかと分布図を掲げ解説した。

なお近畿地方の地名でも比良山なども「平らな山」とは思われず、『古事記』に出てくる「黄泉比良坂」（よもつひらさか）なども坂が平らということは考えにくく、アイヌ語のピラ（崖）との比較も沖縄にもヒラ（崖）の地名があることから、過去の広域にわたるプロト（先史）アイヌ語分布の痕跡かもれしれないというような広域研究が、先述の湿地の二タなどとともに今後の課題となる。

以上のような解説を『漢字講座』所収の「地名の漢字」の章と、私が愛知学院大学在職中に執筆した『文学部紀要』『人間文化研究所紀要』等ならびに『日本語学』32-6（2013 年）の雑誌に執筆した、「アイヌ語地名研究の俗説・定説・補説」から、作成した分布図を引用しながら要約紹介した。

（鏡味　明克記）

第 46 回　地名フォーラム開催案内

日時　2017 年 7 月 23 日（日）14:00～17:00

会場　龍谷大学　大宮学舎　地図　6 頁参照

（京都市下京区大宮通七条東入ル北側）

1　地名学への招待（シリーズⅠ）

地名が「難読・難解」になるのはなぜ？

講師　　糸井　通浩氏（本会副会長）

2　研究発表

テーマ　薩長同盟締結地「御花畑」発見

京都の地名と古地図に導かれ、150 年目に姿を現した屋敷

発表者　原田　良子氏（歴史研究家・本会会員）

☆ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰ岩田　貢氏（本会理事）

講座　地名学への招待（要旨）

難読・難解を解くこと自体が地名研究になっている現状だが、これはまだ地名研究にとっては基礎工事に当たるもので、ここからこそ地名研究は始まると言ってよい。今回は、『地名探究』15 号掲載の「難読・難解地名の生成（上）」を踏まえながら、その（下）として（上）で触れなかった事項・事例などを中心に考察する。表語文字と言うべく音も意味も併せ持つ漢字（中国語の文字）を和語の地名表記に用いてきたが、漢字と和語の関係において、地名に限った特有な表記・用字法（用い方）をする場合を振り返るとともに、さらに漢字の音にも意味にも直接的には関係のない漢字表記をする和語地名を取り上げる。事例としては、「大和」（やまと）、「日下」（くさか）、「長谷」（はせ）、「一口」（いもあらい）など、また「瓢宮」（丹後一宮の奥宮）を「よさのみや」と読む謎にも及んでみる予定。キーワード：漢字の音訓、二文字好字化、枕詞、近接性、複眼的、音韻変化

糸井通浩（いといみちひろ）氏　略歴

京都教育大学・龍谷大学名誉教授。京都地名研究会事務局（副会長）。主な編著書：『京都地名語源辞典』東京堂出版、『日本地名学を学ぶ人のために』（世界思想社）、『京都学の企て』（勉誠出版）、『王朝物語のしぐさとことば』（清文堂出版）、『風呂で覚える百人一首』（改訂版・教学社）ほか多数。

2　研究発表

薩長同盟締結地「御花畑」発見（要旨）

明治維新への大きな転換点となり、教科書にも掲載の薩長同盟であるが、その締結地は謎であった。長ら

く、二本松薩摩藩邸（現在の同志社大学今出川校地の一部）とされてきたが、先行研究により、京都の室町頭にあった「御花畑」屋敷（近衛家別邸で薩摩藩家老小松帯刀寓居）で締結されたことが近年明らかになってきた。薩長同盟締結から 150 年目の昨年 2016 年 5 月、京都府行政文書の発見により「御花畑」の場所を特定に至れた要因は、京都市中「室町頭」と西郷隆盛文書の「御花畠水車」記述の見出しがヒントであった。

維新後の近代的土地所有制度の移行への着目から資料を探し場所を特定できた経緯と、150 年目に姿を現した屋敷の報告から、薩長同盟の性格を再考する。

原田良子（はらだりょうこ）氏　略歴

京都市生まれ。小学校教員を経て、現在は主に西郷隆盛や薩摩藩史を独自に研究する。2016 年 5 月薩長同盟締結地「御花畑」（近衛家別邸・小松帯刀京都邸）の場所を京都府行政文書の発見により特定、同年 9 月論文「薩長同盟締結地「御花畑」発見」（（公社）西郷南洲顕彰会刊「敬天愛人」第 34 号、2016 年）発表。

随想 1　寺の名の付く町名　連載 12　永養寺町

清水　弘（本会常任理事）

永養寺町は、下京区高辻通西洞院西入ルから油小路東入ルの間にあり、高辻通を挟んだ南北の両側町である。

勿論、現在はこの町内に永養寺という寺は存在しない。永養寺という浄土宗の寺は、現在は下京区寺町通仏光寺下ル恵美須之町で、寺町通の東側にある。この寺の寺伝によると、文明 13 年（1481）、観誉という僧が、五条大路（現在の松原通）西洞院付近に創建したという。寺はその後の戦乱で荒廃したのであるが、『京都坊目誌』によると、天正 7 年（1579）、織田信長の命を受けた来誉柏雄という僧が再建したという。永養寺には、この時、京都所司代であった村井長門守貞勝の再興下知状が残されている。それによると、寺の範囲は、東は西洞院通、西は油小路通、北は高辻通、南は五条通（現在の松原通）とあり、その地域は、現在の永養寺町の南半分、舟屋町、麓町の東半分などを含む地域である。

この再建された寺が、4 年後の天正 13 年（1585）、豊臣秀吉の都市改造により、東京極（現在の寺町通）の高辻に移転させられて、現在に至っているのである。

随想 2　連載　北山の山名（7）

小寺慶昭　（本会常任理事）

『コンサイス日本山名辞典』(三省堂)には、全国の山名 9174 座が収録されているが、その中で最も多いのが「○○山」という名称で、全体の七割強に当たる 6539 座を数える。二位が「○○岳(嶽)」で、1617 座、三位が「○○森」の 434 座と続く。「○○峰」は少なく、251 座しか掲載されていない。

「○○森」は東北地方と四国南部に集中している。同辞典には「○○森は深い森林に覆われた山の名称」と説明されている。その正否を判断する力はないが、関西についてはほぼ説明出来そうである。

近畿の最高峰・八経ケ峰(1915m・大峰山系)の稜線上の少し盛り上がった所を弁天ノ森(1600m)という。また、同山系の雄峰・釈迦ケ岳(1800m)の肩の部分にも吉田ノ森(1618)という小ピークがある。つまり、主峰の稜線(肩)部分の盛り上がりが「○○森」なのである。ちなみに、肩の部分の稜線が平地になっている場合は「○○平」と呼ばれる事が多い。信州の名峰・蓼科山(2531m)の肩の部分の将軍平、岐阜と福井の県境

に突き出た異峰・冠山(1257m)の肩の部分の冠平等、その例はかなり多い。高層湿原で有名な北山の八丁平も、もともとは峰床山(970m)の肩の部分にあたることからの命名であろう。

山科盆地から東を臨むと、端正な姿の高塚山(485m)が見える。その北側の稜線上の小ピークが行者ケ森(440m)であり、先に述べた条件に合致する。「森」と呼ばれるだけあって、禿げ山ではなく、木々で覆われている。しかし、「木が多い森」の意味ではなく、「盛り上がっている」という意味での「モリ」であろう。各地に見られる「飯盛山」の「盛」と同じ意味合いである。

京都府内での「○○森」という山名は、行者ケ森以外には一座しか知られていない。それが北山の百井地区の東の天ケ森(813m)である。ところが、この山は「主峰の肩の部分」という条件に当てはまらない。だのになぜ「森」と呼ばれるのだろうか。

実は、地元の人と話すと、天ケ森では通じなかったのである。つまり、近くの天ケ岳(788m)の峰繋がりということで、京の岳人によって勝手に「天ケ森」と命名された可能性が強いと言えよう。

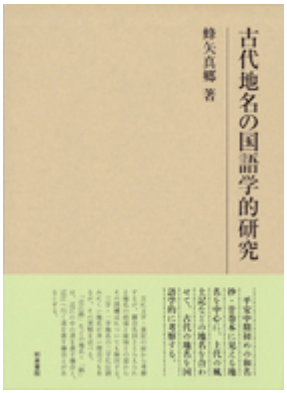
地元では「ナッチョ」と呼ばれている。珍しい名称であり、語源に興味が湧く。澤潔氏(前出)は「年貢などを納める納所が訛ったもの」とされる。魅力的な説だが、音あわせによる推測の域を出ないので、確かな事は分からない。面白いのは、「ナッチョ」は本来は谷の名前であり、その谷を詰めた所に山頂があるということである。村人にとって谷の名前は重要だが、山頂名は特に必要性がなかったのだ。

さて、北山に「○○森」という名称の山がないことが、かえって、北山の特徴をよく表していると考えたい。「○○森」が、主峰の肩の部分だとすると、主峰が必要となる。それに当たる山が北山には殆ど見られない。最近、筆者は「高島トレイル」付近をよく歩いているが、南に繋がる北山を見るにつけ、よくもこれだけ団栗の背比べのような山々が連なっているものだと、いつも感心させられている。山名の比定(見える山々の名を当てる)がこれほど難しい地域も珍しいと言えるであろう。　　(つづく)

龍谷大学大宮学舎（キャンパス）案内図

☆☆☆☆シリーズ　私の地名学文献紹介１☆☆☆

副会長　糸井　通浩



ここに、2017 年 3 月 31 日に刊行された下記の著書を紹介する。

蜂矢真郷著『古代地名の国語学的研究』（和泉書院刊・全 368 頁、定価 10500 円＋税）

蜂矢氏は古代語を対象に、その語構成論的研究を専らとする国語学者で、大阪大学名誉教授、現中部大学教授。

ここで「古代地名」とは、平安中期初めに編纂された『和名類聚抄』（二十巻本）に整理された地名を中心に、『風土記』の地名をも含めたもので、本書は、古代地名を主として「文字・表記」の面から考察している。

本会の十周年記念講演でお話しくださった「地名の二字化ー和名類聚抄の地名を中心に」（論文は『地名探究』10 号に掲載）も本書の第三篇第一・二章を飾っている。その他、和名抄の地名について「語構成」「二合仮名」「読み添え」「音訓混用」「訓注の仮名、及びその促音・撥音等」などのことが各章において考察・分析されている。さらに和名抄伝本の一つ「名古屋市博物館蔵本」のことや「風土記の地名」、「地名と上代特殊仮名遣い」などについても論じられている。

特に注目したいのは、第一篇第一章における「地名」の語構成の面からの分析（地名の語源研究にとって基礎になる研究）と第四篇第四章における「チ［路］とミチ［道］」における事例の詳細な整理と考察（これも「語構成論」の一環）であり、あわせて「二文字」化がもたらした、本来「部」を含む地名の様々な実態が余すところなく論じされているのも圧巻で、これらは第三篇含め、地名研究をするに当たっては必ず参考にしたいところである。

○●受贈図書及び資料●○

◇いずみ通信　№43
　P 18 と P22　に本会の紹介記事
◇岩田書院　地方情報誌
　132　P 47　に 本会の紹介記事
◇いが地名考 冊子など　　伊賀の國地名研究会
◇「ニュースレター熊本之地名」第 185 号
　　熊本地名研究会発行
◇やましろ第 30 号　　城南郷土史研究会発行
◇北斗書房だより　　17 号・18 号
（お送りくださった関係機関に感謝いたします）
□

会員出版物紹介

水野孝典著　『日本人は死んだらどこへ行くのか』□
　全 174 頁　多島海社刊　定価　1000 円＋税

会費納入の依頼

今年度、または今年度含む過年度の会費が未納の方は納入方、よろしくお願いします。

納入状況のお問い合わせは事務局まで。

□　会員勧誘にご協力を□

随時新入会員を募集しています。お知り合いの方への入会のお勧め、皆様のご協力、よろしくお願いします。

原稿募集

会報「都藝泥布」掲載する地名随想の原稿をお寄せ下さい。テーマ・タイトルは自由です

◇次回 59 号の締切は、2017 年 9 月 16 日

会誌『地名探究』第 16 号　　締め切り：11 月末
　　翌年 4 月刊行

◇ご寄稿の際には、会誌『地名探究』15 号の「原稿募集要項」をご参照ください。

☆☆☆☆まちかどの地名☆☆☆☆☆

７頁画像は右京中央図書館に出かけた際に、見かけた表示版。通り過ぎてから、「？」もう一度戻ってまじまじとみつめて激写。確か三条も御池も東西の通りのはず、交わるはずのない平行線が交わっている。これが事実なら世界はもっと平和になっていた、などと独り呟きつつ、下の地図を見ると一目瞭然。

三条通は葛野大路まで来ると急激に北西に向かって曲線を描き、太秦広隆寺へと向かって御池通りと交わるのだ。世界に散在する深刻な平行線もかくあってほしいものだ。

そもそも東西の通りどうしは交わらないという感覚が洛中的思考であると、かの井上章一先生から厳しく叱責を受けそうである。

地名表記をめぐる耳より情報があればお寄せください。

編集後記

都藝泥布第 58 号をお届けする。福岡県飯塚市在住の方から入会の申し込みをいただいた。『地名探究』の表紙や内容について、いつも楽しみにしてくださっているとのこと。他にも遠方からフォーラムに参加していただく方もいらっしゃる。そんな方々の期待を裏切らないように活動内容を充実していかなければならない。今年度からフォーラムのあり方を変えてより魅力あるフォーラムにしていくよう理事会で話し合った。

今後ともご理解とご協力のほど、よろしくお願いいたします。

京都地名研究会のホームページ

にアクセスしてください。1889 ヒットを記録

「Yahoo」などの検索エンジンに「京都地名研究会」と漢字で入力すると本会のホームページにアクセスできるようになりました。

会員情報	催し案内	事務連絡
会誌『地名探究』	出版『京都の地名検証』	
事業活動の記録	役員	入会案内と会則

という８項目のページが画面左側に現れます。

それぞれの項目をクリックすると画面が変わります。

「事務連絡」の画面では、更新日時と常任理事会などのお知らせをしますので、定期的にご覧ください。

スマートフォンからもアクセスできます。

京都地名研究会への入会案内

千年の都、京都。ここを起点として近畿から国の内外に及び地名を広く細かく蒐集し、比較調査して、地名を学ぶ学会です。地名は歴史の鏡であり、文化を盛る器です。私たちの暮らしのもとにある地名に目を向けて、日本の文化と歴史認識をいっそう深め、地域の知的活性化に役立ちたいと念じます。年齢、職業などの如何を問わず、いつでも、どなたでも、地名文化に関心をもたれる方々のご参加を歓迎し、ご協力もお願いします。入会金不要。

年会費	3000 円
賛助会員・理事	5000 円
家族会員	1000 円

事務局

お問い合わせは下記京都地名研究会事務局へ

610-1101

京都市西京区大原野上里男鹿町 14-5

fax　075-331-3431　（入江成治）

e -mail：kyotochimei@gmail.com